

第123回 『盛り場ブルース』 日本縦断、ロード歌謡の傑作

内山田洋とクール・ファイブの昭和50年のヒット曲『中の島ブルース』は、もともと札幌の「中の島」のみを歌ったローカルソングでしたが、レコード化の際に大阪と長崎が加えられ、曲想が全国対象へと拡大されました。

この全国展開への発想は、昭和44年発売の森進一『港町ブルース』、同47年の青江三奈『日本列島・みなと町』あたりをヒントにしたものでしょう。『港町ブルース』は、北海道・函館から始まり日本列島を南下、12の港町を縦断し、鹿児島・桜島に行き着きます。

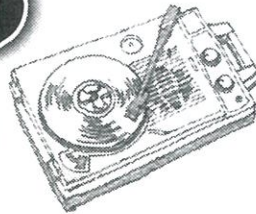
『港町ブルース』は雑誌『平凡』が若手人気歌手・森進一の歌を公募し、その当選作になかにし礼が補作して完成したのですが、詞を構想中の原作者の脳裏には、森ファンに人気の高かった『盛り場ブルース』（昭和42年12月発売）が浮かんでいたのかもしれない。

森の5枚目までのシングル盤A面は詞・吉川静夫と曲・猪俣公章のコンビ

ンビによって作られていましたが、第6弾『命かれても』で作者を変更、森の売り物だった「嗚咽歌唱」を控

名曲カルテ

昭和歌謡と いままで

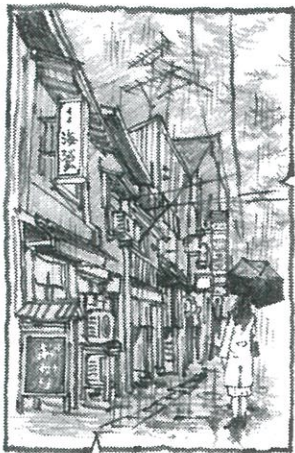


堀井六郎
絵・松本浦

えめにした曲調に変化させます。続く第7弾『盛り場ブルース』（作詞・藤三郎、補作詞・村上千秋、作曲・城美好）も同様の戦略で成功、翌年には東映で映画化もされました。

日本縦断というロードムービーならぬロード歌謡の傑作は歌詞が8番まであり、演奏時間も5分以上に及びます。東京の銀座・赤坂・六本木というブルジョア社用族御用達のネオン街をふり出しに、北海道、仙台、名古屋、大阪、広島、博多と渡り歩き、再び東京に戻ってくるのですが、渋谷・新宿・池袋の庶民街へと流れ着くところに悲哀が感じられます。高校時代、地理の成績が悪かった私ですが、この歌のおかげで大都市の盛り場を覚えました。

『盛り場ブルース』の作詞者・藤三郎は藤圭子の実兄で、妹が中学卒業後に両親と上京する以前から流しをしながら歌手デビューをめざしてい



ました。『盛り場ブルース』の発売は藤圭子のデビューより1年9か月ほど前の時期で、この歌は、兄・三郎が店を渡り歩く自らの体験を、夜の世界に生きる女性たちの人生に重ね合わせて創作したものでしょう。編曲を担当した森岡賢一郎は、この曲の前年に園まりの『夢は夜ひらく』を担当、『盛り場ブルース』の間奏で『夢は夜ひらく』の旋律をそれとなく聞かせてくれます。『盛り場ブルース』はのちに藤圭子もアルバムに収録、ユーチューブで彼女の怨念節が聴けます。

作曲家・城美好は、その後、森の『波止場女のブルース』や同じビクター傘下のクール・ファイブ初期のシングル盤B面に佳曲を提供し彼らを支えた人物ですが、名前がクローズアップされたのは『盛り場ブルース』からでした。この歌では全編で24の盛り場が登場しますが、地名のアクセントに大きな違和感がなく見事な音符の置き方になっています。

森に名曲を贈った城ですが、その正体は、森やクール・ファイブを歌謡界へと導き、森がデビュー前にバンドボーイとして修業していたラテン系ビッグバンド、東京パンチオスのリーダー、チャーリー石黒でした。